
症例報告の書き方

東北大学 大学院医学系研究科
高次機能障害学分野
森悦朗

症例報告とは

- 臨床家は、医学部で聞いた症例の逸話、仲間同士で語られる症例の逸話、患者が語るものから学ぶ
- 曖昧なヒントや警告であるけれども、現実の人物と実際の出来事とつながっていれば忘れがたく、新しい知識をつかむ効率的な方法である
- まさにそれが症例報告の始まりである

症例報告は

- 未知の病態，薬剤の副作用を素早く報告するような場合には極めて有効
- 診断治療に関する貴重な経験を共有
- 次の研究の仮説を得るためのヒント
- 医師になって最初に書く医学論文
- 神経学領域では特に重要

神経学領域では特に重要

Lancet 1996-2002 のCase Report

Organ system classification	Number (%) case reports
Neurology	152 (29)
Gastroenterology	76 (15)
Rheumatology	47 (9)
Respiratory	45 (9)
Dermatology	40 (8)
Cardiology	36 (7)
Haematology	32 (6)
Endocrinology	32 (6)
Obstetrics and gynaecology	19 (4)
Renal	13 (2)
Ear nose throat	10 (2)
Psychiatry	9 (2)
Ophthalmology	7 (1)
Other	5 (1)

Coles A, et al: Lancet 2003;361:1230

症例報告の現況

- 多くの臨床医学ジャーナルでは症例報告が掲載されにくくなっている
 - 症例報告はEBMにおいて一番下位のエビデンス
 - 稀な症例でなくては掲載されないが、稀であれば被引用が減りインパクト・ファクターを下げるので雑誌には好まれない
- しかし最近、症例報告専門誌（多くはe-journal）の発刊があいついでいる
 - Neurocase (Taylor & Francis) 1995~
 - Case Reports in Neurology (Karger) 2011~
 - Case Reports in Neurological Medicine (Hindawi) 2011~
 - BMJ Case Reports (BMJ) 2008~
 - Journal of Medical Case Reports (BMC) 2007~

症例報告の契機

- 診断治療の点で興味深い点があった
- 科学的に示唆に富む知見が得られた
- それは新知見だ！
 - それを支持する十分なデータが得られてなければ人を説得することはできない
 - 従来を知見を知っていなければ何が新知見なのか気付かない
- この情報は広く共有されるべきだ！

» (と、先輩や指導者から言われた)

症例報告の構成

- 抄録: 背景と目的, データの肝要, 結論
- 緒言: 背景と目的を明確に述べる
- 症例: その目的に沿った必要なデータを過不足無く示す
- 考察: 問題の解決にどこまで迫ったかを, 限界を踏まえつつ考察し, 結論を述べる
- 文献: 投稿規定を守る
- 図・表: 本文の補強, 証拠となるもの, 教育・例示的なもの, データを簡潔に提示できるもの
- 英文抄録: 世界に読者がいるということを意識

症例報告の目的

- 稀だから報告するのではない
- 他に報告されていないから報告するのではない
- その症例が今まで分かっていなかった何かを教えてくれているということを読者に伝えるため

症例報告は学術論文

- 院内のカンファレンスで用いるようなレジメとは違う(そこでも正しい表現に心がけておくことが望まれるが)
- 学術論文としての格調を保つ
 - 体言止めは用いない
 - 医学ジャーゴン(業界的言い回し)は用いない
 - 一般的でない略記は初出で書き下す(読者は必ずしも神経内科医とは限らない)

文章表現

- 正しい文法
 - 主語述語の関係が文内(特に重文、複文)および文間で混乱しないように注意
 - 「運動中に左麻痺が出現し、MRIにて脳塞栓症と診断した」
 - 格助詞、能動態と受動態に注意
- 明解な表現
 - 持って回った表現はせずに簡明で能動的な表現をする
 - 「喀痰喀出困難があった」、「緊急入院となった」、「頭部MRIにて多発低信号所見を呈し」

症例の呈示

- プライバシーに配慮, 個人情報が必要最小限にとどめる
- 神経学的検査所見, 検査所見を羅列する必要はなく, 陰性所見も含めて重要なものを過不足なく記載する
- 重要な画像は図示する
- 簡潔で理解しやすくなる場合はデータを表にしてもいいが, 本文と重複しないようにする

考察

- 起: この症例が提起している問題について簡潔にまとめる
- 承: その問題に対して, この症例が教えてくれているところを考察する
- 転: 他のありえる解釈, 限界などについて考察する
- 結: この症例から得られたことの臨床的意義や科学的意義を謳い, 将来の研究や医療の方向性も示す

図・表

- 画像は印刷を考慮して作成する
- 鮮明な高解像度のもので、デジタルが望ましい
- 原画像を示さずに、統計画像だけを示すのは避ける
- 統計画像は補助的であり、それを示すときは、その作成手順を詳細に述べなければならない
- 図・表には必ずタイトルを付け、必要に応じて説明、注釈を付ける
- 表に用いた略号には必ず注釈で説明する

文献

- 背景に関するもの、補完するもの、支持するもの、反駁するもの
- 規定の数以内で適切なものを引用する
- 実際に当たらなければならない論文は引用論文の数倍
- 投稿規定に示されたフォーマットを守る（EndNote®などを使うと便利かも）
- Spellingに注意
- Punctuationに注意

英文抄録

- 世界中に知ってもらうために必要
- 臨床神経学では、abstractはMedline、PDFはJ-stageを通じて入手可能
- 英文抄録は海外に通じる内容・記述 であるべき
- 英文抄録だけで完結しておく(300単語の論文と考える)必要がある、見出し的な日本語抄録とは違う
- Native speakerによる校閲(最近は多くの業者があり、比較的安価)
- しかし、校閲は医学論文に長けたものがしているとは限らないため、表現が適切でないこともあることに注意
- 校閲の前に、内容を十分吟味すること、英語論文に慣れた共著者等の校閲を得ること

症例報告のすすめ

- 症例報告は後方視的であり、仮説検証的ではない研究法
- それでも、症例を見ている時点で、疑問なり仮説すなわちリサーチ・クエスチョンを抱いて、それを解決するためにデータを収集整理しておくという前方視的な態度が勧められる
- この態度は何も症例報告のためだけではなく、臨床のためにもたいへんいいトレーニングになる
- 論文にする中で、足りなかったところに気付かれ、次の臨床に活かされる

症例報告のすすめ

- 学会での発表とは比べものにならない緻密さが要求されるが、その分得るものも大きい
- 高度な施設でなくても使える、アカデミックな動機づけのための強力な道具である
- 医師の役割として、医学研究者の始まりとして、書くことを大いに推奨したい